

## 20 世紀前半の絵葉書にみる大堰川周辺域の景観構成

The Landscape Structure around the Oi River based on Postcard Pictures in the first half of the 20th Century

那須 将\* 樊 磊\*\* 深町 加津枝\*\*\* 下村 彰男\*

Ataru NASU Lei FAN Katsue FUKAMACHI Akio SHIMOMURA

**Abstract:** This paper aims to identify how the landscape of Arashiyama in Kyoto was appreciated in the first half of the 20th century. We focused on the riverside scenery around Oi River. Our research was based on 288 postcards with photographs, which were published between 1900 and 1945. First, we measured the distance and direction between each viewpoint and the farthest point. Based on distances and directions of all postcards, we described scenery types and showed their distribution in the area. Second, we focused on the appearance of water surfaces and analyzed combinations of them. Third, we investigated waterfront lines and scenery elements. Our results were: 1) 6 types of scenery were found. Some of them featured particular viewpoints such as views from Nakanoshima; 2) The description of water surfaces showed variety especially around river structures such as the Togetsu Bridge and the Ichinoseki weir; 3) Over 80% of waterfront lines were interrupted: in many cases, they contained elements such as boats, fishermen, and trees. We concluded that Oi River was appreciated both from distant and close views, and that the location was described in multiple ways. It can be said that the landscape of Arashiyama was appreciated based on a comprehensive perspective of both the land and water zones.

**Keywords:** *Arashiyama, Postcards, Waterscape, Landscape Structure, Places of Scenic Beauty*

**キーワード:** 嵐山, 絵葉書, 水辺景観, 景観構成, 名勝

## 1. 背景と目的

嵐山地区は京都市を流れる大堰川(桂川)にかかる渡月橋を中心とした景勝地である。渡邊ら(2007)<sup>1)</sup>が近代の嵯峨嵐山には前近代とは全く異なる景観が形成されたと述べるように、明治以降には市街化の進行により「街並み」が形成された。そうした近代の嵯峨嵐山の街並み景観を扱った最初期の事例として、明治初頃に上地された天龍寺の境内地処分に着目した小林(2010)<sup>2)</sup>(2012)<sup>3)</sup>がある。1897年には京都鉄道が開通し、観光客誘致を目的に<sup>4)</sup>諸事業が展開され<sup>5)</sup>、小川(2010)<sup>6)</sup>、小川(2011)<sup>7)</sup>、並松(2014)<sup>8)</sup>らはそれらの事業展開による景観への影響を指摘した。1920年以降には別荘地化が進行し人口が急増したが<sup>1)</sup>、渡邊ら(2008)<sup>9)</sup>は渡月橋北詰西側の大堰川河畔が1926年までに宅地転換された可能性を指摘した。このように既往文献では、現在の嵐山観光に欠くことのできない社寺を中心とした街並みの景観が、1897年以降の観光開発に伴って形成されてきた過程が論じられている。

また、近代以降の嵐山地区においては、山林部分の景観のあり方にも焦点が当てられるようになった。1871年の社寺上地処分により嵐山国有林となった山林は、1915年に保護林、1916年に風致保安林に指定され、その後ヤマザクラやカエデの植栽がなされてきた<sup>10)</sup>。中嶋(1994)<sup>11)</sup>は都市計画法、風致地区といった新たな制度の中で京都の「山」に期待されていた役割を整理した上で、1929年と1933年における嵐山山林の施業計画において指向された景観を検証した。岩田(2013)<sup>12)</sup>は1933年以降の施業計画で重視されたアカマツに着目し、計画に先立つ風致概念の形成と、それらの概念が施業計画に組み込まれた過程について論じた。また、嵐山国有林における地域と行政が連携した管理に関する研究事例として、嵯峨の風致保全を企図したローカルエリート<sup>13)</sup>に着目した岩田(2015)<sup>14)</sup>、1939年に発足した嵐山保勝会による活動を取り上げた深町ら(2002)<sup>15)</sup>の研究がある。

対して訪問者側からの研究では、水谷ら(2005)<sup>16)</sup>は1895年から1928年までに京都市が発行した4冊の名勝記に、旧来からの

景物として寺社仏閣や嵐山が一貫して掲載されたことを指摘した。また山口ら(2006)<sup>17)</sup>は昭和初期の観光案内記と文学作品を資料として、既に伝統的な価値認識と評価の方法が確立していた嵐山で、新たな価値を持った嵯峨野の風景が発見された過程を論じた。

以上のように、近代の嵐山における景観研究では、1987年以降の本格的な観光開発に伴って景観構成要素として認識された嵯峨の街並みや嵐山の山林について、知見が蓄積されてきたと言える。

しかしながら1927年に指定された史跡名勝「嵐山峡」の指定区域には、寺院と街並みを擁する嵯峨町、嵐山の山林に加えて大堰川が含まれており<sup>18)</sup><sup>19)</sup>、20世紀前半には街並みや嵐山の山林と並んで、大堰川が形成する水の景観が重要な一要素として認識されていたと考えられる。だが既往研究においては、明治期になされた大堰川に関わる観光事業群や<sup>5)</sup>、新しい遊びとして庶民に開かれた保津川下り<sup>17)</sup>に対する言及はみられるものの、大堰川を対象とした景観研究の観点は限定的なものに留まっている。

一方で近世以前の嵐山を対象とした研究では、水や川の景観が多様な観点から論じられている。出村ら(2006)<sup>20)</sup>は1346年に夢窓疎石が選定した天龍寺十境と十境に対する偈頌を分析し、天龍寺の周辺に企図された景域について論じた。山口ら(2010)<sup>21)</sup>は近世の紀行文を資料として、渡月橋付近の大堰川北岸が嵐山や川下の東山を眺める典型的な視点であり、周辺の川辺や水上には飲食や舟遊びを行う複数の場が生じていたと指摘した。谷山(2007)<sup>22)</sup>は18世紀末までに同地が「花の嵐山」として名所化する過程を、天龍寺と法輪寺による渡月橋の普請に言及しながら考察した。

そして奥ら(2005)<sup>23)</sup>は1933年の施業計画書の中で、嵐山が峡谷域を含んだ大堰川と関連づけて記述されることを指摘した。つまり近世以前において周辺の陸域と一体的に利用されていた大堰川に対する認識の方法は、20世紀前半においても持続していたと考えられる。しかし近代の嵐山の水・川の景観に関する知見は蓄積の途上にあり、その様相については明らかでない。

翻って現代の嵐山では、2013年の台風18号被害を教訓とした

\*東京大学大学院農学生命科学研究科

\*\*京都大学大学院農学研究科

\*\*\*京都大学大学院地球環境学堂

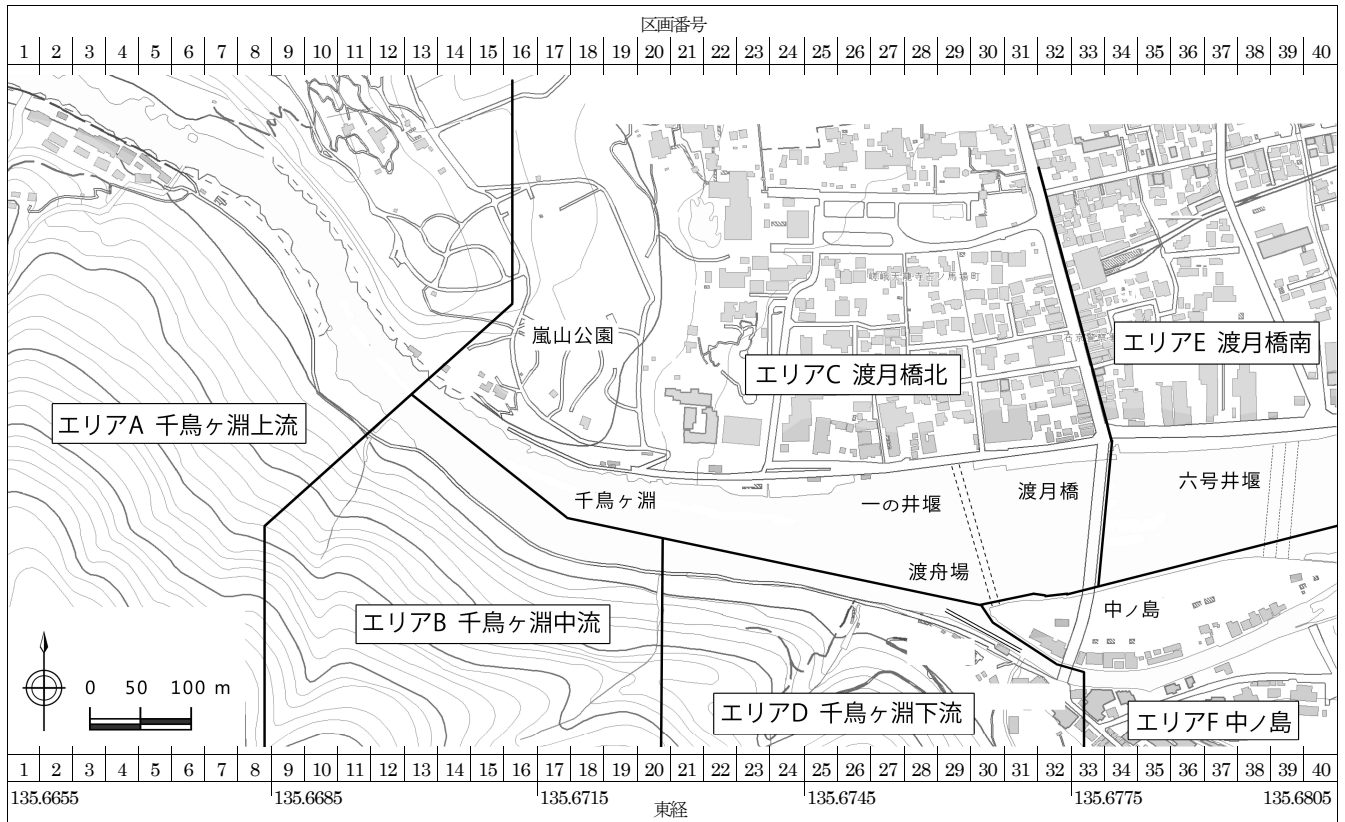


図-1 対象地およびエリアA~F, 区画1~40の範囲

水害リスク管理という文脈から、渡月橋周辺の河川整備需要が高まっている<sup>24)</sup>。山口ら(2007)<sup>25)</sup>が江戸から明治時代にかけて行われた嵯峨野の名所再興事業の成功要因として、過去の見方をアフォードするような物的環境と制度による自然要素の適切な保存を挙げ、「人々の間で共有された景色の見方<sup>26)</sup>が、現実の環境の保全や改変・整備の際の手がかりになり得る」と述べるように、整備指針の検討においては嵐山に蓄積されてきた河川景観の見方に注意を払う必要がある。だが参照されるべき景観の見方に関する知見の蓄積は不十分であり、その検討は重要な課題である。

そこで本論では近代のうち、特に20世紀前半の嵐山における水辺景観に焦点を当て、大堰川を中心とした景観の全体的なパターン、主たる景観構成要素としての河川の描かれ方、そして河川に隣接する要素との関係を明らかにし、嵐山地区における大堰川を中心とした景観認識の方法について考察することを目的とした。

## 2. 研究の方法

### (1) 対象地

大堰川とは京都府を流れる桂川の一部を指す通称である。桂川のうち、東経<sup>27)</sup>135.665500度を上流端、135.680500度を下流端とする範囲とその沿岸を対象地とし、本論ではこの区間を「大堰川」とした。岸の左右、橋や滝など構造物の位置に基づき、対象地に6のエリアを設定した。また経度を基準に対象地を40の方形区に分け、上流側から順に番号を付した。対象地の範囲、構造物等の配置、6エリアと40方形区の範囲を図-1に示した<sup>28)</sup>。

### (2) 資料

本論の資料として絵葉書を用いた。深町ら(2004)<sup>29)</sup>は天橋立を対象とした研究において絵葉書を資料に、近代における天橋立周辺の主要な視点の位置や景観の特徴を読み取り、それらを11の種別に区分して分析している。本論でも視点の推定、景観パターンの抽出、景観構成要素の読み取り等、類似の分析を行うため、資料として好適と考えられる。対象地で観光業を営む住民、郷土

史料を収集する技術職員、研究者各1名から、嵯峨嵐山地域を描いた絵葉書の提供を受けた。以上の母集団に、写真面に桂川流域が描かれた絵葉書が518枚含まれた。そのうち、写真面の印刷が鮮明で撮影地点の推定が可能であり、宛名面の印刷により本論の対象期間である1900年から1945年までに印刷されたと判断でき、かつ写真面に対象地を含む絵葉書288枚を抽出し、資料とした。

### (3) 分析の方法

まず各絵葉書の視点を推定し、次にその視点からの景観について、1)全体的な景観パターンは描写距離と方位、2)主な景観構成要素である大堰川は水面の表現、3)河川と隣接する要素との関係は水際部の描かれ方との関係に着目して、それぞれ分析を行った。

視点の推定は下記の通り行った。2014年9月の晴天時と2015年10月の曇天時に対象地を各1回踏査し、各絵葉書の写真面に近い構図で写真を撮影、撮影地点の経度、緯度、撮影方向を記録した。地理院マップシート<sup>30)</sup>を用いて記録した座標と撮影方向を地理院地図<sup>31)</sup>に入力した<sup>32)</sup>。地図上に表示された地点の座標と撮影方向、撮影した写真、絵葉書の写真面を比較し、各絵葉書の視点と推定される地点(以下「視点場」)を決定した。推定された288の視点場の座標を地理院地図に入力し、経度、緯度、標高を得た<sup>33)</sup>。視点場の分布を踏まえて、三つの観点から分析を行った。

#### 1) 最長描写距離と方位角

景観の距離と方位について、樋口(1993)<sup>34)</sup>、山口ら(2008)<sup>35)</sup>は京都周辺部の山の辺にみられる圍繞空間が、地形に応じて個々に異なる眺望性と方位角を備えるとして述べた。また樋口(1993)は一般に都市化に伴い、河や湖などの水域に眺望性を備えた景観が生じると指摘した<sup>36)</sup>。そこで本論では市街化が進行した20世紀前半の対象地における景観のパターンが眺望性と方位に現れると仮定し、描かれた景観の距離と方位角を視点場の分布と関連付けて検証した。まず各絵葉書の写真面内で、視点場から最も遠くまで描写されている点(以下「最遠描写点」)を一箇所抽出した。対象地周辺の地形図と空中写真<sup>37)</sup>、現地踏査時に撮影した写真を参照し、最遠描

写点の位置を推定した<sup>38)</sup>。推定の例は図-2に示す通りである。視点場の推定と同様の方法で、各最遠描写点の座標と標高を得た。さらに各絵葉書の視点場と最遠描写点の座標を、距離と方位角の計算サービス<sup>39)</sup>に入力し<sup>40)</sup>、二点間の測地線形と、視点場から最遠描写点へ向かう方位(以下「方位角」)を得た。二点間の測地線形と標高差をそれぞれ2乗した和の平方として、視点場から最遠描写点までの距離(以下「最長描写距離」)を算出した。

次に最長描写距離と方位角との関係について、散布図を作成した。各絵葉書の最長描写距離は三角関数を用いてxy座標に変換し原点からの距離で表した。方位角はx軸正の方向を東、負の方向を西、y軸正の方向を北、負の方向を南として表した。

最後に描かれた景のパターンを抽出し、分布を調査した。最長描写距離と方位角の数値、散布図を元に、距離と方位角の関係を景観のパターンとして抽出した。各パターンに該当する絵葉書の枚数を集計した上で(表-1)、6エリアそれぞれに各パターンのうち何枚が分布しているかを算出し、分布として示した。

2) 水面の描写

景観構成要素としての河川の描かれ方について、中村(1982)は河景について幾つかの語彙を挙げながら、一面が等質に思われる水面の一部が峻別され、図化される現象を例示している<sup>41)</sup>。この指摘を踏まえ、大堰川の認識方法がその水面の描かれ方に現れると仮定し、絵葉書の水面描写と視点場の分布との関係を把握した。

資料のうち写真面に水面を含む絵葉書を対象に、主景となる水面の描写を調査した。描写の種類として「平穏」「流れ」「しぶき」の3種を設定し、各絵葉書における描写の有無を質的に判定した。また同じ絵葉書に2種以上の描写が認められた場合は、何と何の組合せかを4通りのうちから一つ選択し記録した。3種の描写の性質と、描写および組合せの判定例を図-3に示した。

水面の描写と、描写の組合せの判定数を、各絵葉書の視点場の座標に基づいて、設定した40の区画ごとに集計した。また各区画において、描写の組合せが認められた群と、認められなかった群、計5通りが、その区画に属する絵葉書の合計枚数に対して占める割合を算出し、積み上げ棒グラフを用いて示した。

3) 水際線の描かれ方と景観構成要素

水陸の境界部における景観認識について、中村(1982)は水際線に関連した図では必ずしも輪郭線が閉じないと指摘した<sup>41)</sup>。また樋口(1993)は風景画に関する議論の中で、人物や道、橋、舟などの点景が適切に配置されることで休息性や隠れ場所性が象徴されると論じた<sup>42)</sup>。そこで本論では水際線の描かれ方と点景となる構成要素に着目し、大堰川の位置づけと景観認識の方法を検証した。

全ての絵葉書を対象に、まず水際線の描かれ方を調査した。各絵葉書の写真面に、構図上水際線が含まれ得るか否か、含まれ得る場合はさらにその見え方を「全て見える」「一部見える」「全く見えない」から一つ選択した。見え方の基準および判定例を図-4に示した。次に、河川に隣接し点景となる景観構成要素について、自然物、人工物、人の活動という観点から、描かれた景観構成要素の有無を調査した。最後に、各絵葉書の水際線の描かれ方を、点景となる景観構成要素(表-3)および6のエリア別にみた視点場の分布(表-4)と関連付けて、分布率を算出した。

3. 結果

288枚の絵葉書のうち、写真面に大堰川水面を含むものは274枚であった。絵葉書の視点場は6のエリアに対して表-1の通り分布しており、また40の区画に対して図-7の通り分布していた。

(1) 最長描写距離と方位角

最長描写距離の最小値は32.7m、最大値は16793.8mで、全体の相加平均は2172mであった。288枚のうち、最長描写距離が1000m未満は118枚、1000m以上2000m未満は97枚存在し、

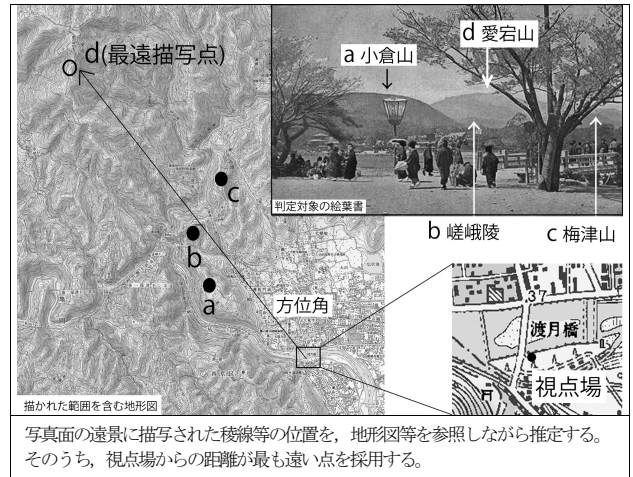


図-2 最遠描写点の判定例

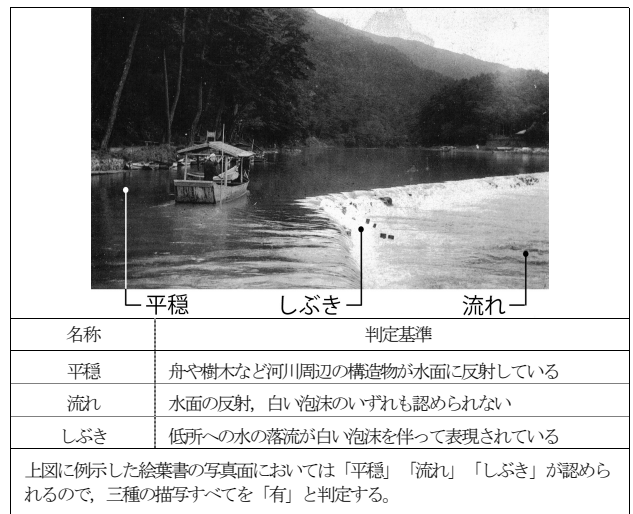


図-3 大堰川の水面描写判定例



図-4 水際線の見え方判定例

表-1 各エリアを視点場とする絵葉書の枚数

エリア		A	B	C	D	E	F
枚数	全数	50	35	54	35	72	42
	水面含む	48	35	51	35	68	37

全体の7割超が平均以下の最長描写距離を示した。平均以上の値の分布をみると、2500m以上3500m未満の範囲で32枚、10950m以上11000m未満で6枚が、それぞれ近い値を示した。

各絵葉書の最長描写距離と方位角の関係は、図-5に示す通りであった。7600m以上の範囲では、方位角は東北東から東南東方向にのみ分布していた。5000m以上7600m未満の範囲では、主な方位角は北西方向で、北ないし北東方向にも若干数が分布した。2500m以上5000m未満の範囲では、方位角は西南西ないし南西方向にのみ偏って分布していた。2500m未満の範囲では、第一に約1500m以下、東から南東を中心とした方位角を示す分布、第二に約1800m以下、南から西の方位角を示す分布、第三に約2000m以下、西から北西の方位角を示す分布が認められた。以上の結果から、最長描写距離と方位角との関係を①から⑥までのパターンとして類型化した。各パターンにおける最長描写距離と方位角の条件、ならびに該当する絵葉書の枚数を表-2に示した。

①から⑥までのパターンに該当する絵葉書の、6エリアに対する視点場の分布枚数は、図-6に示す通りであった。西北西から西南西方向に7500m超の最長描写距離を示すパターン①の視点場は、B、C、Dのエリアのみに分布した。これらの絵葉書には下流方向への流軸景が描かれ、渡月橋の背後に東山を描く構図が典型的に見られた。北西から北東方向に5000m以上の最長描写距離を示すパターン②の視点場はエリアDとFの他、Cにも1枚のみ分布した。これらの絵葉書は愛宕山を初めとする後背山を描く構図が典型的にみられたが、エリアC、Dでは河畔部を視点場の場合は北から北東方向を方位角とする対岸景が、エリアFでは中ノ島西端部を視点場に北西方向を方位角とする流軸景が、それぞれ観察された。西から北西方向に2500m以上5000m未満の最長描写距離を示すパターン③の視点場は、全41枚のうち29枚がエリアFに分布し、その他エリアCに2枚、Dに10枚がそれぞれ分布した。過半数を占めるエリアFに分布した絵葉書には中ノ島西端部を視点場とする上流方向への流軸景が典型的に描かれていたが、パターン②とは異なり後背山の稜線は描かれず、主景は一の井堰や渡舟場の船であった。南から西方向に2500m以下の最長描写距離を示すパターン④の視点場は、全92枚のうち70枚がエリアEに、2枚がエリアFに分布した。これらの絵葉書には左岸下流から渡月橋を挟んで対岸を仰望する構図が典型的に認められ、主景はほぼ全て嵐山の山林であった。一方でエリアCを視点場とする19枚の絵葉書には対岸景の構図は他のエリアと共通するものの、嵐山の山林を排して一の井堰や大堰川水面、対岸の渡舟場を描いたものも見られた。北から南方向に2500m未満の最長描写距離を示すパターン⑤の視点場は、全94枚のうち49枚がエリアAに分布していた。下流方向への流軸景が典型的な構図であり、船や千鳥ヶ淵の水面が多く描かれていた。エリアB、Cにもそれぞれ21枚、16枚が分布しており、これらの絵葉書には対岸景と流軸景が混在していた。西から北方向に2500m未満の最長描写距離を示すパターン⑥の視点場は6エリア全てに分布がみられた。エリアDに最も多くの絵葉書が分布したが、全33枚のうち33%であり、過半数を超えて分布するエリアはなかった。流軸景と対岸景が混在し、典型的な構図は認められなかった。

(2) 水面の描写

1から40までの各区画を視点場とする絵葉書に観察された水面の描写と組合せの割合は、図-7に示す通りとなった。区画10付近、区画30から35など、特定の区画を視点場とする絵葉書に多数の水面描写が認められた。区画22以西では、絵葉書の分布しなかった区画を除いて必ず「平穏」の描写があり、描写の組合せは「平穏+流れ」の一種のみであった。一方、区画23以東では「しぶき」を伴う組合せが出現した。区画29から38にかけては全区画で三種全ての描写が認められ、また比較的枚数の多い区画

表-2 最長描写距離と方位角によるパターン分類

番号	最長描写距離			方位角		割合 (%)	該当枚数	
	m以上	-	m未満	から	まで			
①	7600	-	18000	西北西	-	西南西	5.56	16
②	5000	-	7600	北西	-	北東	4.17	12
③	2500	-	5000	西	-	北西	14.2	41
④	0	-	2500	南	-	西	31.9	92
⑤	0	-	2500	北	-	南	32.6	94
⑥	0	-	2500	西	-	北	11.5	33

※割合 = (各パターンに該当する絵葉書の枚数 / 288(絵葉書総数)) × 100

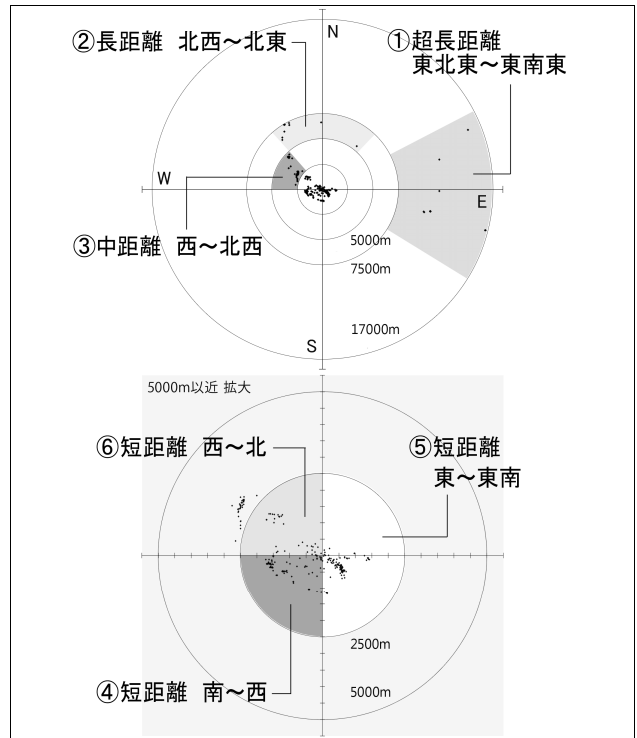


図-5 最長描写距離と方位角との関係

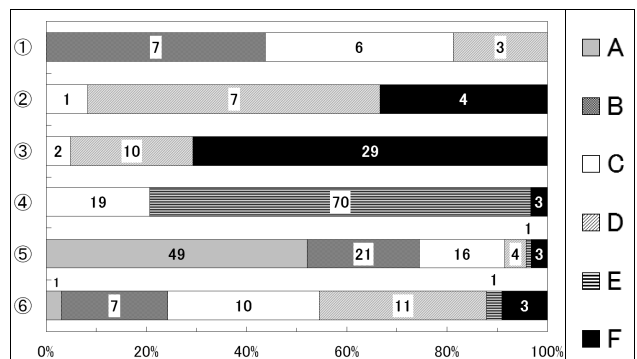
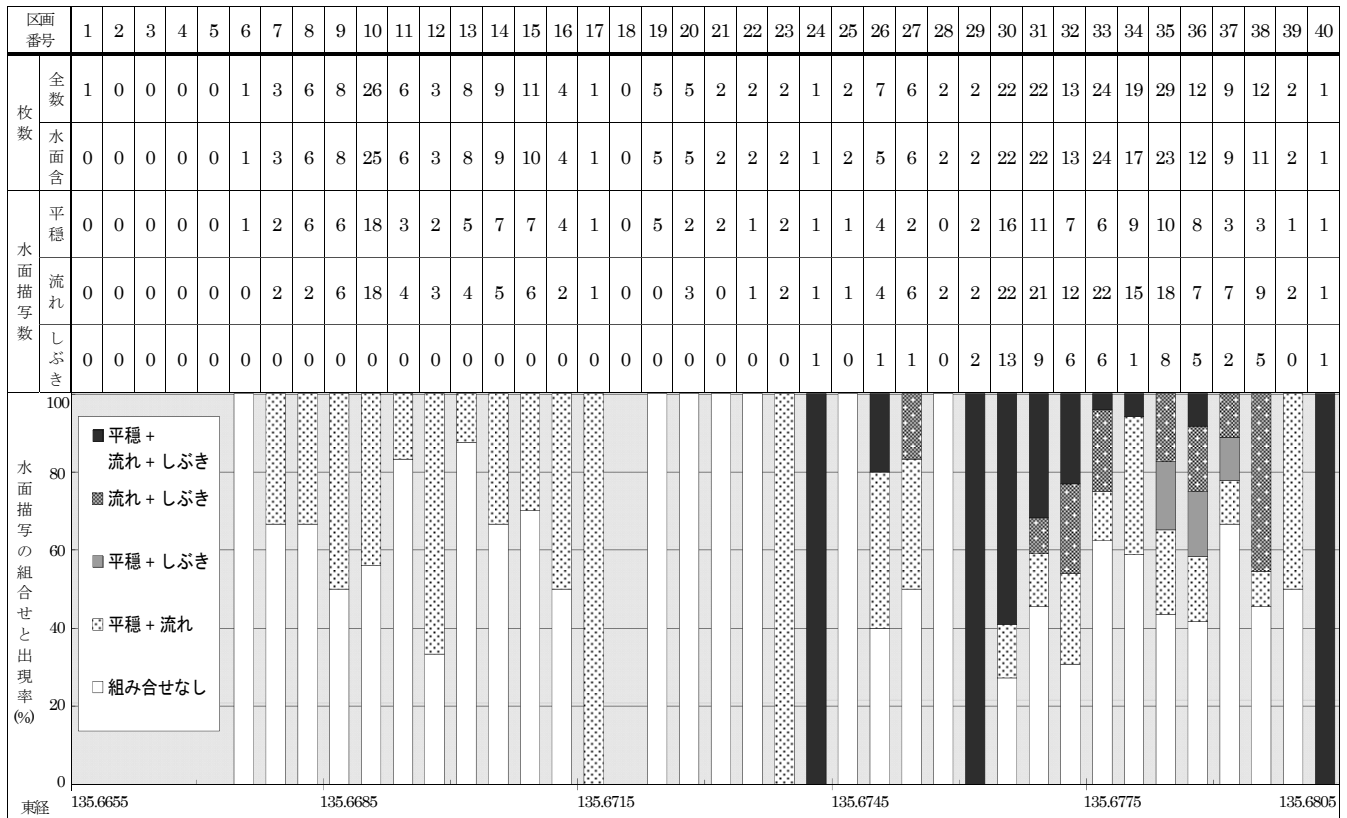


図-6 パターン別各エリアへの視点場分布枚数

30では「平穏+流れ+しぶき」の組合せが63%を占めた。

(3) 水際線の描かれ方と景観構成要素

水際線の描かれ方と景観構成要素の出現率は、表-3の通りであった。最も多くみられた水際線の描かれ方は「一部見える」であり、全体の69%を占めた。両者の関係を見ると、水際線の描かれ方によって景観構成要素の出現率は異なっていた。水際線が含まれない絵葉書では川床や飲食、水際線が見えない絵葉書ではマツとサクラの独立木、棧橋や眺め行動、一部が見える絵葉書では舟遊びや釣りなどの行動、全て見える絵葉書では樹林や木材筏、筏の操作などの出現率が、その他の景観構成要素を合算した出現率より



図一七 各区画を視点場とする絵葉書の枚数および大堰川の水面描写数と描写の組み合わせ出現率

も高くなっていた。またD, Fなど特定のエリアに出現しやすい、又は出現しにくい水際線の描かれ方がみられた。

#### 4. 考察

表一に示された各エリアを視点場とする絵葉書の枚数と、図一六に示されたパターンごとの分布から、各パターンの分布をエリア別に見ると、視点場がエリアAに分布した50枚のうち49枚がパターン⑤、同じく視点場がエリアEに分布した72枚のうち70枚がパターン④と、両エリアにはほぼ単一のパターンに属する絵葉書のみが分布していた。エリアAでは下流方向への流軸景が、エリアEの渡月橋南では対岸の嵐山を仰望する対岸景が、それぞれ定式化していたと考えられる。

また、全絵葉書の7割超が2500mに満たない最遠描写距離を示す大堰川周辺において、パターン①、②、③に該当する絵葉書の視点場は、変化に富んだ景を觀賞できる特異的な地点であったと推察される。パターン①は総数16枚のうち7枚(44%)がエリアB、6枚(38%)がエリアCに分布し、その視点場は水上、あるいは水面に接した河畔であった。エリアFにはパターン②の総数12枚のうち4枚(33%)、パターン③の総数41枚のうち29枚(71%)が分布し、その視点場は中ノ島の西端であった。以上のエリアでは水際にまで近寄りそこを視点とすることで、対象地内で例外的に中距離以上の遠望景が得られたものと推察される。

一方で、奥ら(2005)は2000年に写真を用いた印象調査を元に「嵐山らしさ」指標の分布について考察する中で、やや上流の渓谷域まで含んだ『嵐山峡』としての捉え方が単なる『嵐山』へと縮小していると指摘し、戦後の国有林の施業指針において渡月橋中心の嵐山像が強化されてきた<sup>23)</sup>と述べている。本論においてはエリアEを視点場とするパターン④の景観認識の方法が継承されたと推察されるが、その他のエリア、パターンにおける景観の見方は、現代に至るまでに限定されてきた可能性が示唆される。

図一七に示された各区画の水面描写数を見ると、区画22以西で

は主として「平穏」な水面が描かれたのに対して、区画23以東では「しづき」の表現が出現し、また流れ表現の組合せが多様化していた。図一の地形図および図一七を参照すると、区画22以西は千鳥ヶ淵であり、この区画付近の流域では静かな水面、もしくは川面に浮かぶ倒景が図として觀賞される<sup>41)</sup>傾向があったと考えられる。対して区画30付近には一の井堰が、区画33付近には渡月橋が存在し、これらの河川内構造物が存在する流域においては、構造物により生じる「流れ」や「しづき」のような水の運動と、それらが組み合わせられ同時に出現する水面が觀賞される傾向があったと考えられる。水際線に着目して対象地の絵葉書を見ると、水際線の一部だけが描かれる構図が全体の約7割を占め、全部が描かれたものの割合は、全く描かれないものの割合と同程度であった。水際線付近における空間の相互浸潤という性質は、河川が自然と人為との共生空間であるという環境の特性に依拠する<sup>42)</sup>ことから、このような認識の方法が消失することのないよう、水際の景観処理に際しては水陸の環境のやりとりや、地域と河川の動きのやりとりの創出が求められる。また景観構成要素との関係を見ると、水際線の描かれ方に応じて特定の景観構成要素の出現率が高くなっていた。本論で扱った景観構成要素を親水象徴として捉えたと、絵葉書においては水際線の一部が見えていれば舟遊びや釣り、見えなければ河畔から枝を伸長させる独立木、全て見えていけば材筏による生業の様子というように、親水象徴として用いられる景観構成要素は、水際線の描かれ方やエリアに異なる傾向があったと考えられる。

#### 補注及び引用文献

- 1) 渡邊秀一・木村大輔・小林善仁・藤井暁(2007): 嵯峨野景観地の近代史的変容に関する予備的考察。佛敎大学アジア宗敎文化情報研究紀要3, A1-A59
- 2) 小林善仁(2010): 山城国豊前国津和野の境内地処分と関係資料。關西史学33, 1-23
- 3) 小林善仁(2012): 近代初期における天龍寺境内地の景観とその変化。歴史学部論集(02), 23-42
- 4) 藤森泰子(2003): 嵯峨・嵐山における観光地形成。大阪学院大学通言教育34, 279-292

表-3 水際線の描かれ方別にみた景観構成要素

景観構成要素		合計 枚数	水際線 なし		水際線あり						
					見えない		一部見える		全て見える		
			14	4.9	39	13	18	69	37	13	
自然物	樹林	広葉樹	59	2	3.4	9	15	36	61	12	20
		針葉樹	62	2	3.2	8	12	40	65	12	19
		サクラ	19	1	5.3	3	15	10	53	5	26
		紅葉	14	0	0.0	1	7.1	8	57	5	36
	独立木	マツ	68	4	5.9	13	19	42	62	9	13
		サクラ	21	1	4.8	4	19	11	52	5	24
		紅葉	4	0	0.0	0	0.0	2	50	2	50
		岩	64	0	0.0	5	7.8	50	78	9	14
		浅瀬	107	0	0.0	14	13	75	70	18	17
	人工物	散策路	89	3	3.4	16	18	66	74	4	4.5
舟		147	0	0.0	15	10	116	79	16	11	
木材筏		56	0	0.0	3	5.4	40	71	13	23	
栈橋		34	0	0.0	7	21	24	71	3	8.8	
川床		13	2	15	1	7.7	10	77	0	0.0	
人の活動	乗船 / 操船	109	0	0.0	8	7.3	96	88	5	4.6	
	釣り	104	0	0.0	1	1.0	98	94	5	4.8	
	歩く / 散策	238	13	5.5	32	13	165	69	28	12	
	材筏の操作	22	0	0.0	1	4.5	15	68	6	27	
	飲食する	10	1	10	3	30	6	60	0	0.0	
	座る / 休息	113	3	2.7	6	5.3	98	87	6	5.3	
	眺める*	59	1	1.7	13	22	36	61	9	15	
			枚	出現率	枚	出現率	枚	出現率	枚	出現率	
・各セルの出現率(%) = (各セルの枚数 / その行の合計枚数) × 100 ・各列の出現率のうち、「水際線なし」列は上位2位までの値のセルを、「水際線あり」3列は上位6位までの値のセルを、それぞれ白抜きで表示した。 ※写真面に描かれた人物の視線が大堰川の水面または対岸方向に向いており、かつ、それ以外の「人の活動」をしてない時、「眺める」と判定した。											

表-4 エリア別にみた水際線の描かれ方

エリア		合計 枚数	水際線 なし		水際線あり						
					見えない		一部見える		全て見える		
			14	4.9	39	13	18	69	37	13	
A	千鳥ヶ淵上流	50	2	4.0	8	16	37	74	3	6.0	
B	千鳥ヶ淵中流	35	0	0.0	2	5.7	24	69	9	26	
C	渡月橋北	54	3	5.6	8	15	34	63	9	17	
D	千鳥ヶ淵下流	35	0	0.0	5	14	29	83	1	2.9	
E	渡月橋南	72	4	5.6	13	18	45	63	10	14	
F	中ノ島	42	5	12	3	7.1	29	69	5	12	
6エリア合計		288	14	4.9	39	13	168	69	37	13	
			枚	分布率	枚	分布率	枚	分布率	枚	分布率	
・各セルの分布率(%) = (各セルの枚数 / その行の合計枚数) × 100 ・各セル分布率を同列の「6エリア合計」行の値と比較し、特に値が大きいセルを白抜き、小さいセルを濃灰色で、それぞれ表示した。											

- 5)渡邊秀一(2008): 名所案内からみた近代嵯峨・嵐山の観光業: 歴史学 34, 1-19
- 6)小川以(2010): 嵯峨・嵐山の観光先駆者 - 風間八左衛門と小林吉明らによる嵐山温泉・嵯峨遊園社を中心に -: 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 10, 1-18
- 7)小川以(2011): 企業勃興期における京都観光資本家の目論見と違算・料亭・嵐山三事家株式会社発起を中心に -: 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 11, 1-17
- 8)並木信久(2014): 近代京都の観光開発と会社設立 - 嵯峨野・嵐山を中心に -: 京都産業大学日本文化研究紀要 19, 372-407
- 9)渡邊秀一・木村大輔・小林智二(2008): 景観復原資料としての旧日公図 土地台帳の利用-明治大正期の嵯峨嵐山における土地画と土地利用を通して: 歴史学 34, 21-45
- 10)Fukamachi,K・Oku,H・Kumagai,Y・Shimomura,A.(2000): Changes in landscape planning and land management in Arashiyama National Forest in Kyoto: Landscape and Urban Planning 52, 73-87

- 11)中嶋節子(1994): 昭和前期における京都の景観保全思想と森林施業 - 京都の都市景観と山林に関する研究: 日本建築学会計画系論文集(459), 185-193
- 12)岩田京子(2013): アカマツ保全言説の検討-京都における風景概念の展開: Core ethics 9, 39-47
- 13)岩田京子(2013): 1930年代の名望家と呼ばれる側面をもって社会活動をした数ある人びとを指し、同論では1906年から1910年にかけての嵯峨野の林長を務め、事業家でもあった小林吉明を取り上げた。
- 14)岩田京子(2015): 風景思想の転換に参与したローカルエリート - 小林吉明による京都市郊外の風景保全・保勝事業を事例として -: Core ethics 11, 1-11
- 15)深町加津枝・奥敬一・熊谷洋一(1999): 嵐山国有林における昭和前期の風景施業の展開: 日本林学会論文集 109, 211-214
- 16)水谷肇・山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦(2005): 京都府出版の名勝記にみる嵐山・嵯峨野の景物に関する研究: 景観・デザイン研究論文集, 191-194
- 17)山口敬太・水谷肇・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦(2006): 昭和前期の嵯峨における風景の価値評価に関する研究: デザイン研究論文集 1, 185-192
- 18)1927年の指定地蔵堂「嵯峨野大字下嵯峨 嵯峨野大字上嵯峨 嵯峨野大字天龍寺、松尾村大字上山田字嵐山、大堰川筋中裏野田嵯峨野大字水青龍龍流点ヨリ下河町大字下嵯峨境界点ニ至リ間」
- 19)国指定文化財等データベース <<http://go.go.jp/1927>>, 2015.12.8 更新, 2016.1.10 参照
- 20)出村嘉史・荒川優・樋口忠彦(2006): 天龍寺における十境と景観に関する研究: 都市計画別冊 都市計画論文集 41(3), 529-534
- 21)山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦(2010): 近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究: 土木学会論文集 D66(1), 14-26
- 22)谷山勇太(2007): 近世の嵐山と橋 天龍寺の寺務日誌を素材として: 社会科学 79, 37-67
- 23)奥敬一・深町加津枝(2005): 嵐山の森林景観における地域らしさの評価調査: ランドスケープ研究 68(5), 747-752
- 24)桂川嵐山地区河川整備に関する検討委員会 これまでの経緯 <<http://go.go.jp/1927>>, 2015.3.31 更新, 2016.1.10 参照
- 25)山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦(2007): 嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究 - 祇王寺、落柿舎、扇輪庵の再興事例を通して -: 土木計画学研究・論文集 24, 307-314
- 26)山口ら(2007)によれば「物的環境から風景として情報を抽出するその仕方」
- 27)本論において経緯緯度を十進法で記載した。測地系は世界測地系 1984(WGS84)による。
- 28)画像は、地理院地図から出力した画像加工ソフトで作成した。
- 29)深町加津枝・奥敬一(2004): 天龍寺における歴史的景観の変遷と地域住民の景観評価に関する研究: ランドスケープ研究 67(5), 813-818
- 30)地理院マップシートダウンロードサイト <<http://go.go.jp/DX/SD4>>, 2016.3.8 更新, 2016.3.8 参照
- 31)地理院地図 <<http://maps.gsi.go.jp/>>, 2015.9.18 更新, 2015.9.23 参照
- 32)地理院マップシートご写真番号、経度、緯度、方角、形状、アイコン、サイズの列を作成し、一行を写真一枚として、写真番号に対応する経緯度と方角を入力した。入力した情報を KML 形式で出力し、地理院地図上の付図・ファイルツールを用いて KML ファイルを読み込んだ。
- 33)視点場と指定された地点に、地理院地図上の付図・ファイルツールを用いてマーカーを設置した。設置した288のマーカーの情報を KML 形式で出力し、地理院マップシートに入力した。各マーカー設置地点の経緯度と、基礎地図情報データによる各地点の標高を得た。
- 34)樋口忠彦(1993): 日本の景観 ふるさとの原型: 筑摩書房, 138-139
- 35)山口敬太・川崎雅史(2008): 平安京周辺部の別業における地形付随機能の空間的特性: 土木学会論文集 D64(4), 598-607
- 36)前掲 34), 163-174
- 37)地形図は電子地形図 25000 のうち定型図部「京都市北西部」(2015年5月更新)および「亀岡」(同年1月更新)を、空中写真(国土院が提供する空中写真と電子国土基本図)を、それぞれ参照した。
- 38)山口ら(2008)(前掲 35))は、平安京周辺部における広域環境の分析過程で「周辺の地形は平安時代から大きく変化がないと考えられる」と指摘した。同研究の対象は嵯峨嵐山付近に位置する嵯峨野と嵯峨野が含まれる。本論で参照した測量成果の作成年代と、資料である絵巻書の発行年代には開きがあるが、年代差により地点の推定に齟齬が生じる可能性は低いと判断した。
- 39)距離と方位角の計算 <<http://go.go.jp/7Uzm3>>, 2015.9.8 更新, 2015.9.23 参照
- 40)視点場を出発点、最終観望点に到着点として入力した。また、世界測地系 1984 による経緯度を用いていることから、楕円体は GRS80 を選択した。
- 41)中村良夫(1982): 風景学入門: 中公新書, 39-41
- 42)前掲 34), 209-211
- 43)篠原修(編)(1998): 景観用語辞典: 朝日社, 234